

ドラムンベース

ドラムンベースとは？

ドラムンベースの原型となったのは、
1990年代はじめにイギリスで誕生した「ジャングル」と呼ばれるビート。
33回転のレコードを45回転で再生(=早回し)することで面白い効果が得られる
ということに気づいたレゲエDJたちが、
そのテクニックを利用した曲作りを始めたのがきっかけだったようです。

そんな「ジャングル」の手法を取り入れつつ、
元となる素材によりシンプルなビートを取り入れたり、単発素材を追加したりなど、
様々な創意工夫をへて誕生したのが「ドラムンベース」です。

現在では、両者を明確に切り分けることは少なくなっており、
いずれのビートも「ドラムンベース」として扱われるケースが多いようです。

ドラムンベースの特徴

「ドラムンベース」の特徴は、やはりその疾走感です。

回転数をあげたターンテーブルでブレイクビーツを再生することによる、アップテンポなビートこそがその魅力で、「ジャングル」「ドラムンベース」ともに、BPM160前後で演奏されることが多く、数あるダンスミュージックの中でもアップテンポな部類のビートとなります。

また、手数が多い複雑なリズムもドラムンベースの大きな特徴といえるでしょう。

加えて、キックやベースによる「ずーん」とした重低音も特徴のひとつで、まさに「ドラムンベース」の名にふさわしいサウンドとなっています。

- BPM160前後のアップテンポなビート
- 手数が多い複雑なリズム
- キックやベースによる重低音

BPM160前後のアップテンポなビート

ブレイクビーツを本来のテンポより高速再生するこのジャンルです。

無理やりテンポアップすることによる
疾走感あふれるサウンドを得ることができます。

元のループはBPM100のものを、BPM160までアップさせることで
かなり疾走感が出るのがお分かりいただけると思います。

手数の多い複雑なリズム

「ドラムンベース」では元となる素材に「シェイク・ビート」を用いることが多いです。

「シェイク・ビート」は2 & 4拍以外に16分音符単位で細かく刻まれるスネアが特徴。

それをアップテンポで再生することでさらに複雑なリズムへと進化します。

加えて、シンコペーションを多用したキックもテンポアップによる複雑化を後押ししていますね。

キックやベースによる重低音

「ジャングル」「ドラムンベース」では、
音程の低いどっしりしたキック&ベースがよく用いられます。

ダンスフロアに響きわたる独特の重低音も、
このジャンルの大きな特徴のひとつといえるでしょう。

ドラムンベースの音色選び

ドラムンベースにおいても、リズムループ選びが最大のキモとなります。

市販のサンプリングCDではBPM160前後のループはおおよそドラムンベースのビートが収録されていることが多く、それらを使うのが最も簡単な方法です。

一方で、本来の作り方同様に、BPM80～100前後のループをBPM160までテンポアップさせて使用するのも良いでしょう。

楽曲の雰囲気に合わせて、ぴったりの方法を選んでみてください。

ドラムンベースの打込みのコツ

ドラムンベースの打込み方法も、以下の方法が考えられます。

- リズムループを単体で使用する場合
- 単発素材orサンプラーで補強する場合

リズムループを単体で使用する場合

こちらはシンプルに、楽曲にマッチしたリズムループを選定して貼り付ければ一応事足ります。

が、やはりそれだけでは面白くないという方も多いのではないのでしょうか。

そんな時は、ブレイクビーツの王道テクニック。

素材を切り貼りしながらビートを組み替えてあげましょう！

- リズムを組み替えたり
- 高速連打したり
- バッサリ切り落としたり

様々な加工を施すことで、

ブレイクビーツならではのアグレッシブなビートを作ることができます。

単発素材orサンプラーでリズムを補強する場合

ヒップホップ同様、
単発素材やサンプラーを使ってリズムを補強することができます。

その際に使用できるテクニックは、
いずれもヒップホップの回でご紹介したものと同様となりますので、
詳細な説明は割愛します。

- ローカットでキックのダブリを解消する
- 波形編集でキックのダブリを解消する
- グルーヴを揃える